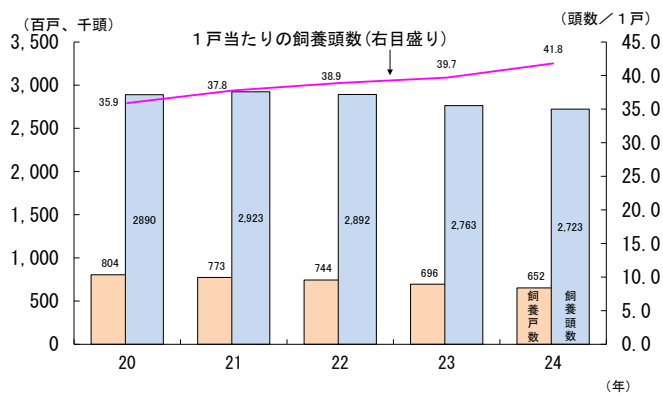


牛肉

◆飼養動向

24年2月現在の肉用牛の飼養頭数、1.4%減少

図1 肉用牛の飼養戸数および飼養頭数



資料：農林水産省「畜産統計」
注：各年2月1日現在

肉用牛の飼養動向を見ると、肉用種は、18年以降、増加傾向で推移していたが、23年以降、宮崎県の口蹄疫発生の影響などにより減少に転じ、24年は183万1000頭(▲2.0%)となった。乳用種は17年以降減少傾向で推移し、22年に6年ぶりに増加に転じたものの、23年以降再び減少に転じ、24年は39万3000頭(▲4.7%)となった。交雑種は、18年以降増加傾向で推移していたが、22年、23年と減少した。24年は再度増加に転じ、49万9000頭(3.3%)となった。こうした結果、24年の肉用牛の総飼養頭数は、272万3000頭(▲1.4%)と3年連続で減少した。

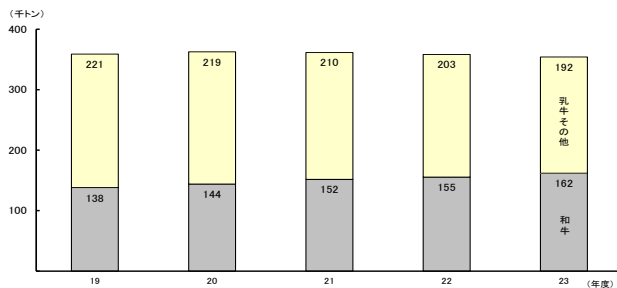
また、飼養戸数は、生産者の高齢化による廃業などにより、24年は6万5200戸(▲6.3%)と減少した。

この結果、1戸当たりの飼養頭数は41.8頭(2.1頭増)と規模拡大が続いている(図1)。

◆生産

23年度の生産量、1.2%減少

図2 牛肉の生産量



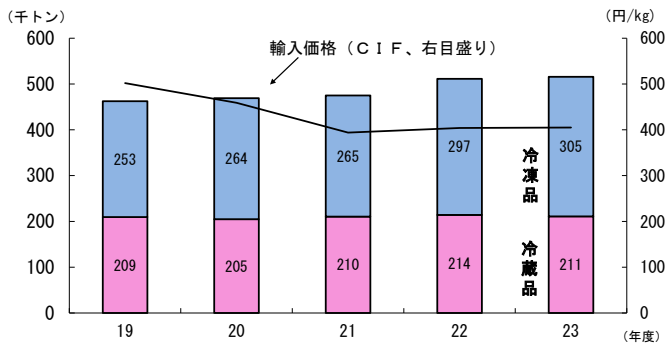
資料：農林水産省「食肉流通統計」
注1：部分肉ベース、注2：乳牛その他には、乳牛の他外国牛等を含む

23年度の牛肉の生産量は、3年連続の減少となる35万4000トン(▲1.2%)となった。このうち交雑種は、酪農家において後継搾乳牛を確保するため乳用種との交配が進み、と畜頭数が減少したことから、23年度は7万3000トン(▲15.7%)と大幅に減少した。一方、和牛は16万2000トン(4.2%)とやや増加した(図2)。

◆輸入

23年度の輸入量、0.9%増加

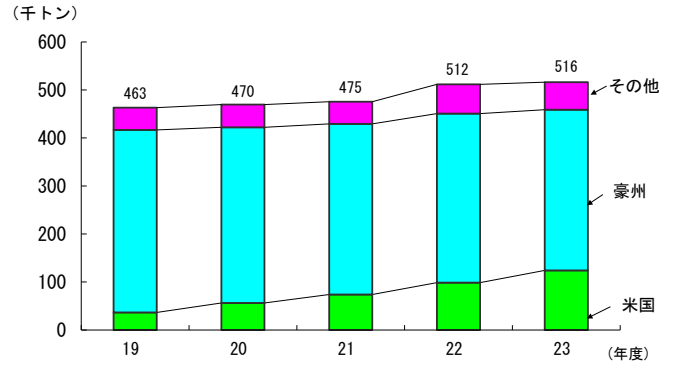
図3 牛肉の輸入量



資料：財務省「貿易統計」
注1：冷凍品にはくす肉等を含む。
2：部分肉ベース

牛肉の輸入量は、20年度以降増加傾向で推移し、23年度は、米国産の大幅な増加などから51万6000トン(0.9%)と、4年連続の増加となった(図3)。

図4 牛肉の国別輸入量



資料：財務省「貿易統計」
注：部分肉ベース

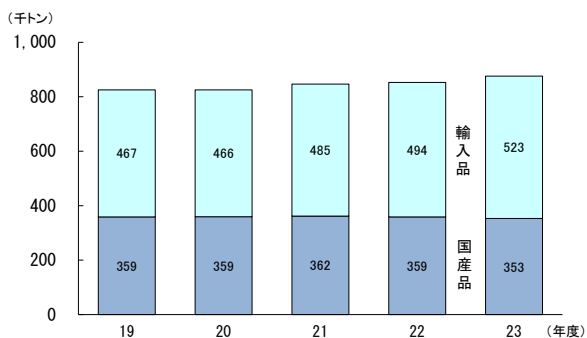
米国産は、BSEの発生により輸入が停止されていたが、輸入再開以降増加傾向にあり、23年度は12万4000トン(25.9%)と大幅に上回った。輸入牛肉の約6割を占める豪州産は33万5000トン(▲5.0%)と5年連続で減少した。また、豪州産、米国産に次いで多いニュージーランド産は2万9000トン(▲12.0%)と、減少した。(図4)。

◆消費

23年度の推定出回り量は2.7%増加、家計消費は0.8%減少

推定出回り量

図5 牛肉の推定出回り量

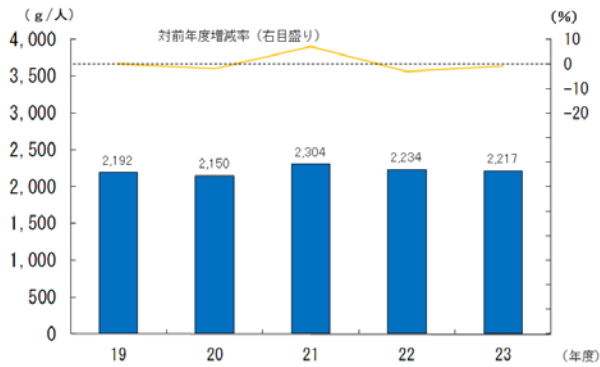


資料：農林水産省「食肉流通統計」,財務省「貿易統計」,農畜産業振興機構調べ
注：部分肉ベース

牛肉の推定出回り量は、19年度に米国産牛肉の輸入増加、国内生産量の増加などを背景に増加に転じた後、引き続き増加傾向で推移している。23年度は、生産量は減少したものの輸入量が増加したことを受け、87万6000トン(2.7%)と3年連続で増加した(図5)。

消費

図6 牛肉の家計消費量(1人当たり)



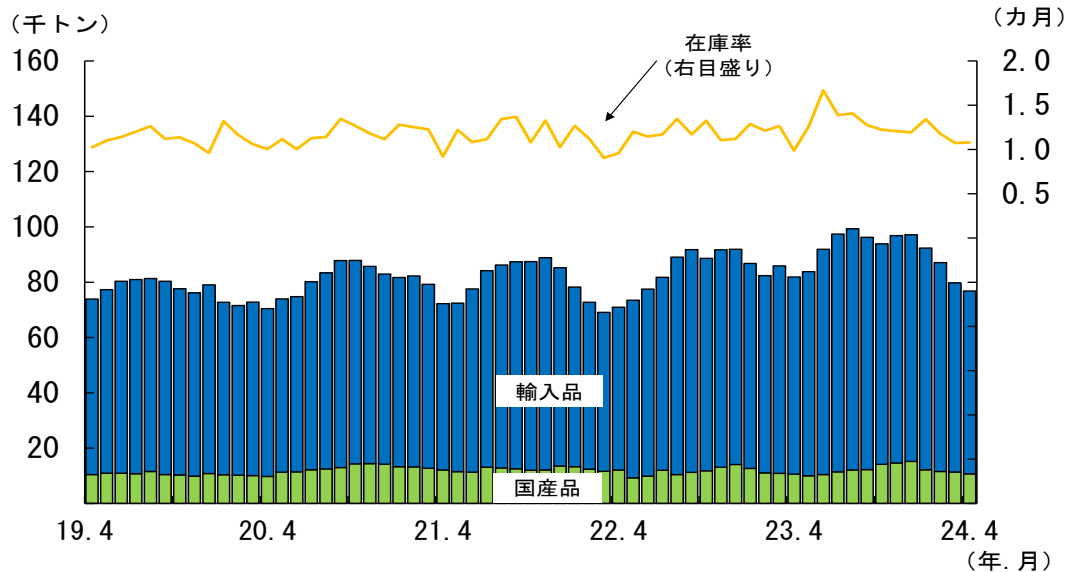
資料：総務省「家計調査報告」

牛肉需要量の約3割を占める家計消費は、15年度以降おおむね減少傾向で推移した。その後、21年度は、消費者の経済性志向などを反映して小売価格が低下したため、牛肉の値ごろ感が高まり、内食化が進化したことなどにより増加した。しかし、22年度以降、景気低迷による消費の減退などから再び減少に転じており、23年度は2,217グラム(▲0.8%)とわずかに減少した(図6)。

◆在庫

23年度の期末在庫、7.2%減少

図7 牛肉の推定期末在庫量と在庫率



資料：農畜産業振興機構調べ

注1：在庫率＝在庫量／推定出回り量

2：部分肉ベース

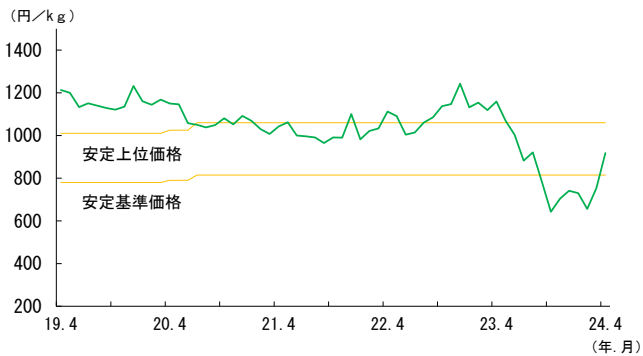
22年度の期末在庫量は、国産品がかなりの程度減少したものの、輸入品が大幅に増加したことから、全体では8万6000トン(24.4%)と大幅に増加した。23年度は、国産品が1万1000トン(4.5%)とやや増加したものの、輸入品は、前

年の反動もあり、6万8000トン(▲8.9%)とかなりの程度減少した。この結果、全体では8万トン(▲7.2%)とかなりの程度減少し、在庫率は約1.07カ月となった(図7)。

◆枝肉卸売価格(東京・省令)

23年度の卸売価格(省令規格)、271円安のキログラム当たり837円

図8 牛肉の卸売価格(東京・省令規格)

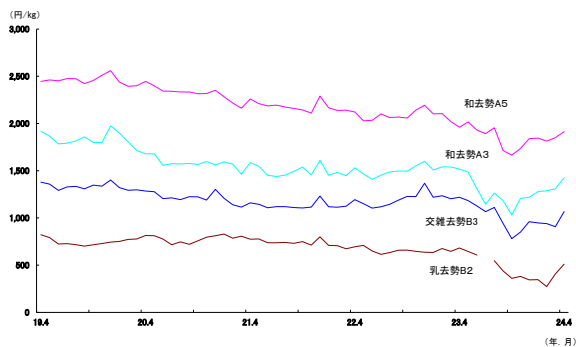


資料：農林水産省「食肉流通統計」

注1：省令規格は、去勢牛B2とB3の加重平均

2：消費税を含む

図9 牛肉の卸売価格(東京・種別)



資料：農林水産省「食肉流通統計」

注：消費税を含む

省令規格

23年度の牛枝肉卸売価格(東京・省令)は、東京電力福島第一原子力発電所事故を受け、牛肉から放射性セシウムが検出されたことによる風評被害により、キログラム当たり837円と大幅に下落した。なお、24年4月以降、同事故以前の水準に、徐々に回復している(図8)。

和牛

和牛(去勢)の卸売価格は、放射性セシウムの検出による風評被害により、秋から冬場にかけて大きく下落したことから、23年度は、A5がキログラム当たり1,852円(▲11.3%)、A3が同1,270円(▲15.7%)と、いずれもかなり大きく下落した。(図9)。

乳牛

乳牛(乳用種去勢牛B2)の卸売価格は、放射性セシウムの検出による風評被害が特に大きく影響し、23年度はキログラム当たり458円(▲30.1%)と大幅に下落した。特に、24年2月には同273円(▲59.6%)と著しく下落したものの、24年4月以降、回復に転じている。

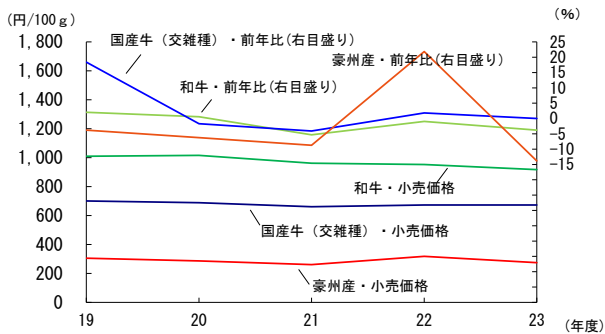
交雑種

交雑種の卸売価格は、他の品種と同じく放射性セシウムによる風評被害により、秋から冬場にかけて急落したことから、23年度は、交雑種去勢牛B3がキログラム当たり1,003円(▲16.3%)と大幅に下落した。

◆小売価格

23年度の小売価格、和牛及び輸入品（豪州産）は値下がり、国産品（交雑種）は横ばい

図10 牛肉の小売価格(サーロイン・特売価格)



資料：農畜産業振興機構調べ

注：消費税を含む。

和牛の小売価格(サーロイン、特売価格)は、消費者の経済性志向の高まりにより高級部位が敬遠されたことから、21年度以降下落基調で推移しており、23年度は100グラム当たり917円(▲3.8%)と3年連続の値下がりとなった。

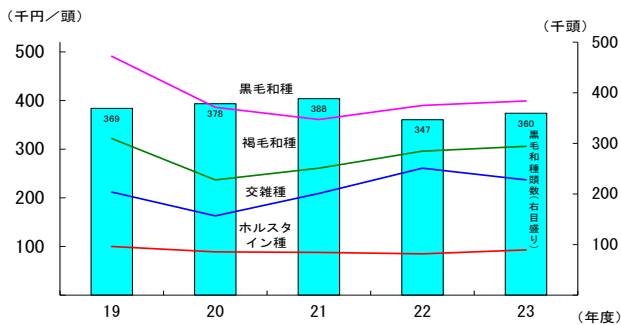
一方、国産品(交雑種)は、需要は強くないものの生産量が減少していることから、前年並みの同673円となった。

豪州産輸入牛肉は、21年度に米国との競合や豪ドル高の影響などからかなりの程度下回ったものの、22年度は、輸入品(冷蔵)の供給量が減少したことなどから大幅に上回った。23年度は、前年の反動もあり再び下落に転じ、同274円(▲13.8%)とかなり大きく下落した(図10)。

◆肉用子牛

23年度の肉用子牛価格、黒毛和種、褐毛和種、ホルスタイン種で上昇

図11 肉用子牛の市場取引価格と頭数(黒毛和種)



資料：農畜産業振興機構

注：消費税を含む。

黒毛和種

黒毛和種の取引価格は、18年度に過去10年間で最も高い水準を記録した後、19年度以降は、枝肉卸売価格の低下などにより下落傾向となった。その後22年度から上昇に転じ、23年度は1頭当たり40万円(2.4%)とわずかに上昇

した。取引頭数は、17年度以降増加傾向で推移したが、22年度は、宮崎県の口蹄疫の発生の影響により減少した。

23年度は若干回復基調となり、36万頭(3.7%)とやや増加した(図11)。

褐毛和種

褐毛和種の取引価格は、21年度以降、取引頭数が減少したことから引き合いが高まり、23年度は1頭当たり30万6000円(3.6%)とやや上昇した。

ホルスタイン種

ホルスタイン種の取引価格は、19年度以降、枝肉卸売価格の低下などから下落傾向で推移していたが、23年度は、取引頭数が減少したことから引き合いが強まり、1頭当たり9万3000円(8.7%)とかなりの程度上昇した。

交雑種

交雑種の取引価格は、21年度以降、取引頭数の減少などから上昇傾向で推移していたが、23年度は、取引頭数が増加したことを受け、1頭当たり23万7000円(▲9.1%)と2年ぶりに下落した。